

人生のつまずき

【聖書】 列王記下 20章 12～21節

そのころ、バビロンの王、バルアダンの子メロダク・バルアダンは、ヒゼキヤが病気であるということを知り、ヒゼキヤに手紙と贈り物を送って来た。ヒゼキヤは使者たちを歓迎し、銀、金、香料、上等の油など宝物庫のすべて、武器庫、また、倉庫にある一切のものを彼らに見せた。ヒゼキヤが彼らに見せなかったものは、宮中はもとより国中に一つもなかった。預言者イザヤはヒゼキヤ王のところに来て、「あの人々は何を言ったのですか。どこから訪ねて来たのですか」と問うた。ヒゼキヤは、「彼らは遠い国、バビロンから来ました」と答えた。更に、「彼らは王宮で何を見たのですか」と問うと、ヒゼキヤは、「王宮にあるものは何もかも見ました。倉庫の中のものも見せなかったものは何一つありません」と答えた。そこでイザヤはヒゼキヤに言った。「主の言葉を聞きなさい。『王宮にあるもの、あなたの先祖が今日まで蓄えてきたものが、ことごとくバビロンに運び去られ、何も残らなくなる日が来る、と主は言われる。あなたから生まれた息子の中には、バビロン王の宮殿に連れて行かれ、宦官にされる者もある。』」ヒゼキヤはイザヤに、「あなたの告げる主の言葉はありがたいものです」と答えた。彼は、自分の在り中は平和と安定が続くのではないかと思っていた。ヒゼキヤの他の事績、彼の功績のすべて、貯水池と水道を造って都に水を引いたことは、『ユダの王の歴代誌』に記されている。ヒゼキヤは先祖と共に眠りにつき、その子マナセがヒゼキヤに代わって王となった。

【序】 国家存亡の危機のさなかに

イスラエルの国は BC1000 年にダビデが王についてから、その子ソロモンの二代にわたって絶頂期でした。BC922 年にソロモン王が死に、レハベアムの代になりますと王国は南と北に分裂してしまいます。北王朝は 19 代目の王の時にアッシリアに滅ぼされました。BC721 年のことです。南王朝は 20 代目の王の時にバビロンに滅ぼされました。BC587 年のことです。日本の歴史では神武天皇の即位が BC660 年頃です。

その間に南北併せて 39 人が王位につきましたが、ヒゼキヤがピカイチの優れた王だったと聖書では評価されています。彼は 25 歳で南王国の王になりましたが、6年目の BC721 年に、北王国がアッシリア帝国に滅ぼされる歴史の激動を経験します。その結果、南王国はアッシリア帝国の強力な支配をもろに受けるようになりました。最初は父アハズ王同様に屈服していましたが、イスラエル建国の精神ダビデの信仰に立ち戻って国を建て直す決意をしました。

彼は偶像礼拝を一切廃止しました。父アハズ王が取り入れたアッシリアの神の祭壇も、エルサレムの都から取り除きました。これはアッシリアへの反抗の決意表明です。彼はアッシリアに対抗するためにエジプトと同盟を結びました。アッシリアの東にある丁度ユダ王国と同じ立場のバビロンとも同盟を結びました。小国が手を結んで南と東からアッシリアをけん制しようとしたのです。

アッシリア王は大軍をもって地中海沿いにエジプトに向って侵略して来ました。そしてユダ王国も

エルサレムを除いて制圧しました。アッシリア王センナケリブは降伏するよう脅迫状を突きつけてきました。このような国家存亡の危機の中に、ヒゼキヤは死の病にかかったのです。39歳でした。

[1] 家を整理せよ

預言者イザヤがヒゼキヤに告知しました。「主はこう言われる。『あなたは死ぬことになっていて、命はないのだから、家族に遺言をしなさい』」。新改訳聖書では「あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ。直らない」と訳されています。新改訳の方が単刀直入で心に突き刺さってきますね。次の王になったマナセは未だ誕生していません。王位を誰が継承するのか。国家の危機の中で緊急な課題になります。

ヒゼキヤは壁に顔を向けて神さまに祈り、今死ねませんと涙を流して大いに泣きました。すると神さまはイザヤに語られました。「わたしはあなたの祈りを聞き、涙を見た。見よ、わたしはあなたをいやし、三日目にあなたは神殿に上れるだろう。わたしはあなたの寿命を15年延ばし、アッシリアの王の手からあなたとこの都を救い出す。わたしはわたし自身のために、わが僕ダビデのために、この都を守り抜く」。神さまはアッシリアの大軍の中に霊を送り込み、風評に惑わされて混乱させ、敗走させてしまいました。こうしてエルサレムの都もヒゼキヤ王も奇跡的に救われたのでした。やはり神さまに祈らなければなりません。神さまは私たちの涙と祈りを受けとめてくださるお方なのです。

私はここで「あなたの家を整理せよ。あなたは死ぬ」という言葉に注目したいと思います。私たちは誰でも皆死ぬのです。死なずに済む者は誰一人いません。生まれたその日から、私たちは死に向かって一日一日を生きているのです。寿命は確実に短くなっていくのです。ではいつ死んでもよいように家を整理しているでしょうか。生きることだけを考えているために、家が乱雑になってはいませんか。

私は月曜日に書斎を一応片付けるのですが、6畳一間がすぐに乱雑になってしまいます。毎日届く書類や手紙が多過ぎます。新聞や本を読んでいると直ぐに溜まって処理しきれなくなってしまう。6畳一間でもこうなのですから、一軒の家となりますと主婦の方々のご苦労は大変ですね。「あなたは死ぬ。家を整理せよ」。どきっとさせられます。私たちは生きることばかり考えないで、死ぬことも考えて一日一日を生きていかなければいけません。日曜日の礼拝、この時間こそ私たちに、神さまの言葉を聞きながら、自分の命を静かに見つめる貴重なひと時ではないでしょうか。

「あなたは死ぬ。家を整理せよ」。この言葉を読むと母が心に浮かんでまいります。83歳の12月に脳内出血で危篤状態になりました。しかし5月まで意識の戻らぬまま病院で過ごし、静かに息を引き取りました。84歳でした。12月に年内もちませんと言われて、いよいよ葬式かと覚悟を決めて母の部屋に入り、たんすの引き出しをあけていきますと、不似合いな風呂敷包みを見つけました。開いてみましたら、自分の葬式用のために必要なメモ、連絡先や写真、大切にしている聖書の言葉、折にふれて寄稿した自分の文章ののっている会報等の記録などが、ちゃんとまとめられていたのです。

母は頭も手足もそれはよく動く働き者でした。しかし脳の老化萎縮とともに、朝の身支度に 1 時間かかり、よろけて倒れるとなかなか起き上がれない体になっていきました。あのよく動いて沢山の仕事をテキパキこなした昔日の面影を全く失ってしまいました。しかしもどかしがって「早く死んだ方がましだ」などと口走ることは、全くありませんでした。生き死は全て神さまにお任せしきって、神の時を待つ姿勢は、それこそ背筋が伸びて、しゃんとしていました。

私は箆笥から出てきた風呂敷包みに、「神さま、もう十分に生きました。なるべく苦しまないで、周りの者にも迷惑をかけずに、御許にお召しくださいませ」と朝に昼に夜に神さまに捧げていた母の祈りを見出した思いがいたしました。「あなたは死ぬ。家を整理せよ」。だから母はあのように潔く晩年を過ごしたのでしょうか。本当にこの言葉は大切ですね。

[2] ヒゼキヤの思い上がり

遠方のバビロン国から病氣見舞いの使節が、王の手紙と贈り物を携えてヒゼキヤのもとにやってきました。既に快復していたヒゼキヤは大歓迎して、宮中ではもとより国中の宝物や武器等の大切な物を全部見せました。このような力を持つ自分たちがバビロン国と同盟を結ぶのだという、信頼と友好を示した積りなのでしょう。

使節が帰った後で預言者イザヤは、王に質問しています。「彼らは何処から来て、何を言ったのか」。「何を見せたのか」。そしてイザヤは言いました。「主の言葉を聞きなさい。『王宮にあるもの、あなたの先祖が今日まで蓄えてきたものが、ことごとくバビロンに運び去られ、何も残らなくなる日が来る、と主は言われる。あなたから生まれた息子の中には、バビロン王の宮殿に連れて行かれ、宦官にされる者もある。』」。これはバビロン捕囚の預言です。ヒゼキヤは 15 年寿命を延ばしていただいて在位 29 年働き、54 歳で死にました。そしてイザヤのこの預言は、ヒゼキヤが死んで 110 年ほど後の BC587 年に、歴史の現実となったのでした。ヒゼキヤには 100 年後に、今自分より劣っていると思えたバビロンが、アッシリア帝国を倒してその支配を受継ぎ、やがて南に下ってきて我がユダ王朝を滅ぼすなどとは、思いもよらないことだったのでした。

預言者イザヤは、王たちのいかなる同盟政策にも批判的でした。「エジプト人は人であって、神ではない。その馬は肉なるものにすぎず、霊ではない。主が手を伸ばされると、助けを与える者はつまずき、助けを受けている者は倒れ、皆共に滅びる」(イザヤ 31:3)。「主なる神はこう言われた。『お前たちは、立ち帰って、静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることこそが力である』と。しかし、お前たちはそれを望まなかった」(30:15)。

ヒゼキヤはセンナケリブの大軍が押し寄せて来た時には、イザヤと共に、主なる神さまにのみ依り頼んで、救いを得ました。それにもかかわらず現実的な政治家としては、どうしても同盟を結んで大国に立ち向かう政策を捨て切ることが出来なかったのです。バビロン王の使節が帰った後で、イザヤを通してバビロンと同盟を結ぶ誤りを厳しく指摘された時、彼はこう答えています。

「あなたの告げる主の言葉はありがたいものです」。「彼は、自分の在世中は平和と安定が続くのではないかと思っていた。」——神さまの言葉は GOOD です。なぜなら北王国がアッシリアの捕囚になったように、バビロンに連れて行かれる事態が、今急に起こることではない。万一起こるとしても先の世代のことなのだから、と受取ったからでした。しかしヒゼキヤ王ともあろう人が、国家の将来に対して、その様に無責任な受取り方でよいのでしょうか。

この出来事を記した歴代誌下 32 章の方の平行記事では、「ヒゼキヤは受けた恩恵にふさわしくこたえず、思い上がり、自分とエルサレムの上に怒りを招いた」(25 節)と記されています。主に泣いて祈って、癒やしていただいたのなら、バビロンの使節が来た時にも、どのように対応すべきかを主に伺いして、その指示を仰ぐべきだったのです。そうしなかったのは、如何なる同盟にも反対するイザヤを敬遠し、自分の判断を通そうとしたからでしょう。

「エジプト人は人であって神ではない。その馬は肉なるものにすぎず、霊ではない。主が手を伸ばされると、助けを与える者も、助けを受けている者も、皆共に滅びる」「安らかに信頼していることこそが力である」——イザヤを通して語りかけておられる神さまの言葉を、ヒゼキヤはよく知っていたはずですが。だから聞こうとせず、自分の我を通そうとしたとするならば、やはり名君と呼ばれる評価に思い上がって、自分の考えでよしとして、謙虚に神の声を聞こうとしなくなってしまったと言わざるをえません。

[結] 人をつまづかせる驕り高ぶり

ダビデ王も重い病の床につきました。しかしこう歌っています。「教えてください、主よ、わたしの行く末を、わたしの生涯はどれ程のものか、いかにわたしがはかないものか、悟るように」。「主よ、それなら何に望みをかけたらよいのでしょうか。わたしはあなたを待ち望みます。あなたに背いたすべての罪からわたしを救い、神を知らぬ者というそしりを、受けないようにしてください」(詩編 39:5、8～9)。

ダビデは、重い病に苦しんだ時に、自分の生涯のはかなさを悟らせてくださいと祈りました。そして神さましか望をかけるお方はいないと自覚した時に、神さまに背いてきた自分の罪の数々が心に浮かんで来て、先ずその罪から救ってくださいという祈りが、ほとぼしり出てきたのでした。ヒゼキヤも今は死ねませんと大声で泣いて癒しを祈り求めましたが、ダビデのように自分の罪深さを自覚させられて、病気よりも先にその罪の赦しと救いを祈り求めたのでしょうか。彼の祈りにはそれがありません。

ダビデはこうも祈っています。「知らずに犯した過ち、隠れた罪から、どうかわたしを清めてください。あなたの僕を驕りから引き離し、支配されないようにしてください。そうすれば、重い背きの罪から清められ、わたしは完全になるでしょう。どうか、わたしの口の言葉が御旨にかない、心の思いが御前に置かれますように、主よ、わたしの岩、わたしの贖い主よ」(詩編 19:13～15)。

ヒゼキヤも、ピカイチの名君と評価される王でした。知らず知らずのうちに驕り高ぶる思いや言動が現れてきたのではないのでしょうか。ダビデは「知らずに犯した過ち、隠れた罪から、どうかわたしを清めてください。」と祈っています。「驕りから引き離し、支配されないようにしてください。」と祈っています。罪の自覚がない心は傲慢になり、謙虚に他人の意見を聞こうとしなくなります。そしてつまずいてしまうのです。知らずに犯してしまった過ちがないか、自分の目から隠された罪から清めてください、驕り高ぶりから引き離して支配されないようにしてくださいと、私たちも常にこの祈りを心で唱える者のなりたいものです。

ヒゼキヤはイザヤから誤りを厳しく指摘された時に、主の御心を訊ね求めなかった罪を、どうして率直に認めなかったのでしょうか。ダビデは「あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。」「神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください」(詩編 51:5～6、12)と祈っています。人生につまずいてしまった時に、「あなたに背いたことをわたしは知っています」と告白して、その前に謙虚にひれ伏せるお方、聖なる神さまを、私たちは持たなければなりません。自分の命のはかなさ、知らずに犯した過ちを自覚させ、悔い改めさせて下さるお方を、私たちは持たなければなりません。謙遜にひれ伏す祈りの時を持たなければなりません。その時私たちはつまずきから立直り、100年先に祝福をもたらす正しい判断と決断を、神さまから与えられるでしょう。

完